

東教育財団だより

新しい評議員と役員が決まりました

東教育財団は、六月一九日に評議員会を開催し、平成二六年度事業報告及び決算を審議するとともに、同日付で任期満了となる評議員、理事及び監事の選任替えを行いました。



評議員会会議風景

評議員会が財団の重要事項の決議機関であることから、その構成員である評議員(定数一三〇名以内)は、東地区の連合

発行所
公益財団法人
東教育財団
大阪市中央区南本町
2-2-11 堺筋本町
西尾ビル6階
電話06(6262)7363
発行責任者 長谷隆雄

町会の会長及び各種団体の東地区代表者で構成することになっていきます。その任期は四年であるので、公益法人制度改革による公益認定後初の選任替えとなりました。

評議員名簿

- 連合町会長**
- 木下修二(愛日)
 - 米田良成(久宝)
 - 西口佳克(汎愛)
 - 森田芳充(北大江)
 - 五十嵐茂(中大江東)
 - 加藤正二(中大江西)
 - 山田忠治(南大江西)
 - 日ノ下盛弘(玉造)

団体代表者

- 石井好男(老人クラブ)
- 應田俊子(保護司会)
- 石井恵子(女性団体)
- 石中清香(スポーツ推進)
- 兼重義浩(青少年指導員)

計一三名(年齢制限にかかる内規、該当者一名及び辞退者一名の枠は空席とする)

これまでの役員(理事及び監事は、理事長及び監事一名を除いては、公益認定前と同様地元代表で構成することとしていました。役員の任期は二年であるので、公益認定後初となる前回の役員選任替えでは、従前どおりとしましたが、今回は、理事や監事の職務権限を勘案して、次のとおり選任されました。

理事名簿

- 地域代表者**
- 橋本英男(愛日)
 - 富樫龍健(集英)
 - 梅本憲史(中大江)
 - 伊藤弘一郎(南大江)
 - 清水隆司(玉造)
- 有識者**
- 赤銅久和(学校教育)
 - 黒田光(〃)

監事名簿

- 新谷忠子(社会教育)
 - 齋藤拓也(行政)
 - 榎野勝(元・行政)
- 計一〇名

理事経験者

- 西尾午郎(前・理事)

有識者

- 野上俊二(行政相談委員)

事務局長経験者

- 井上俊夫(前・事務局長)

計三名

なお、理事等を選任した評議員会終了後、理事会が開催され、理事長、会計理事及び審査理事の選定が行われ、次のとおり決定しました。

- 理事長 榎野 勝
- 会計理事 富樫 龍健
- 審査理事 梅本 憲史

財団事務局長が交代しました

六月一日付で井上俊夫が事務局長を退任し(井上俊夫は六月一九日付で監事に就任しました)、同日付で長谷隆雄が事務局長に就任しました。

平成二六年度

事業報告及び決算

六月一九日に開催された評議員会において、平成二六年度事業報告及び決算が承認されたが、その概要は次のとおりです。

事業報告

助成事業

学校教育事業助成(助成件数三三件)

八、九四九、二九四 円

【幼稚園(二二件)】

計 二、四〇〇、〇〇〇 円

【小学校(二四件)】

計 四、一〇〇、〇〇〇 円

【中学校(四件)】

計 一、三八四、八二〇 円

【高等学校(二件)】

計 三九九、四七四 円

【特別支援学校(二件)】

計 五六五、〇〇〇 円

社会教育事業助成(助成件数一七件)

六、一三〇、〇〇〇 円

【社会教育(二二件)】

五、六五〇、〇〇〇 円

【生涯学習(五件)】

四八〇、〇〇〇 円

地域文化事業助成(助成件数三九件)

六、八四〇、〇〇〇 円

【地域文化(三二件)】

四、八四〇、〇〇〇 円

【特定事業(八件)】

二、〇〇〇、〇〇〇 円

決算

収入(経常収益計)

三八、六三一、九三八 円

【基本財産利息】

三八、六三〇、三八四 円

【受取利息収益】

一、五五四 円

支出(経常費用計)

三八、九八二、五六六 円

【事業費計】

二六、七二〇、二九八 円

支払助成金

二二、九一九、二九四 円

その他

四、八〇一、〇〇四 円

【管理費計】

二二、二六二、二六八 円

差引(当期経常増減)

△ 三五〇、六二八 円

『助成事例の紹介』

上記助成事業の具体例を紹介いたします。

- ◎ 学校教育事業助成 (1)

《親子でふれあい栽培事業》



玉造幼稚園では、春・冬の年二回、親子でふれあい栽培を実施。また、年五回、子どもたちが季節の野菜や草花を植栽。この事業により、園児・保護者共に栽培活動への興味が広がったという。

(助成額二〇万円)

- ◎ 学校教育事業助成 (2)

《こども文楽学習発表会》

高津小学校には、全国でも珍しい文楽の学習と発表会がある。毎年、五年生が三学期から六年生の二学期までの十ヶ月間、プロの演者の指導を受けて文楽を上演できる技量を身につけ、十一月に発表会を行う。他の学年は、六年生の文楽練習の様子を見学し、発表会で文楽に親しむ。この取組みにより、上級生に憧れの眼差しを向ける下級生は多く、上級生の自覚を育むことにもつながっている。(助成額二〇万円)



子ども文楽学習発表会風景

◎ 学校教育事業助成 (3)

《吹奏楽部活動》

東中学校の吹奏楽部は、学校行事での演奏をはじめ、各種演奏会での演奏、地域行事での依頼演奏など、その活動範囲は極めて広く、とりわけ、「サンクスコンサート」は地域で大変好評を得ている。

(吹奏楽部活動とコンサート活動を合わせて助成額八〇万円)



「サンクスコンサート」風景

◎ 社会教育事業助成

《子どもの健全育成および環境整備事業》



中央区子ども会育成連合協議会では、キックベースボール大会やソフトボール大会を開催し、また、子どもの生命と安全を守る啓発活動などを通じて、子どもの健全育成と環境整備を図っている。

(助成額五〇万円)

◎ 地域文化事業助成

《桜まつりお茶会》



桜まつり 風景

中大江校下桜まつり実行委員会では、中大江公園で満開の桜を楽しむながら、能も鑑賞できる「桜まつり」を開催し、同時に、茶道家によるお点前披露と解説を聞き、抹茶を楽しむ「お茶会」も催す。このことにより、古典伝統芸能に親しみ、地域文化の向上に寄与し、併せて、住民と企業市民との交流を図る。

(助成額二〇万円)



◎ 地域文化事業助成

《せんば鎮守の杜音楽祭》

せんば鎮守の杜芸術祭とどけ愛の歌実行委員会では、坐摩神社の境内に野外特設ステージを設え、中央区内の生涯学習ルームで活動するコーラスグループや東中学校吹奏楽部をはじめ、企業や商店街などの同好グループで構成される一三の文化団体(合唱・器楽・詩吟・箏曲など)に対し、コーラスや演奏活動の場を提供し、船場を拠点とする音楽活動を通して地域文化の育成や創造に寄与している。

(助成額二〇万円)



音楽祭昼の部 風景

大阪歴史(迷)探訪

— 小坂・大坂・大阪 —

古代の大阪を「なにわ」と称し、「浪速・浪華・難波」の字を当てたことは先に書いた。

「大坂」の初見は、蓮如上人の御文章で、「東成ノ郡生玉ノ庄内大坂トイフ在所(略)明応第五之秋下旬ノ比ヨリ(略)コノ在所ヲミソメシヨリ(略)一字ノ坊舎ヲ建立セシメ」とある。明応五(一四九六)年、浄土真宗の僧蓮如が現在の大阪城のところに石山御坊を建て、寺内町の建設にかかったのである。



これが現在の大阪というまちのはじまりで、ともすれば大阪というまちは豊臣秀吉がつくったように思いがちだが、実は蓮如がつくったこの寺内町が始まりである。

生玉ノ庄(生國魂神社がそこにあった)内には、「大坂」または「小坂」と呼ばれるところがあり、いずれも「おさか」と発音していて、文献上大坂の用例が登場しても、大坂と小坂は混用されていた。現に『厳如往来記』永祿四(一五六一)年の条には「小坂本願寺」の名がみえる。「小坂」の初見は、古く室町期である。僧明空編纂『冥曲抄』の収録曲「熊野参詣」に「九品津、小坂、郡戸の王子」とある。熊野詣の遙拝所を王子といい、九十九ある王子の一つとして小坂が登場する。

「大坂」の用字を広く普及させたのは、豊臣秀吉である。天正一一(一五八三)年、秀吉は石山本願寺に巨城を築き、派手好きな彼は小坂の「小」を忌み、縁起のよい「大」を使って大坂城とした。

ただ、その読み方は直ぐに「おほさか」に改まったわけではない。『大阪府全志』(大正一一年発行)には「小坂又は大坂の称は互用され来たりしが、後小坂の文字を没し、単に大坂の文字を用いて『おほさか』と呼べるも、土人のなほ大坂を『おさか』を唱ふるは小坂の遺風なるべし」とある。

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の中で、弥次喜多が伏見の京橋で淀川の夜船の客寄せを聞く条に、船頭「大坂(おさか)の八軒家舟じゃ。乗って行かんせんかい」、弥次「此舟に乗って大坂(おほさか)から先へやらかそう」とある。大坂者の船頭はオサカと、江戸っ子の弥次郎兵衛はオオサカと、区別して言わせているのが面白い。

大坂から「大阪」に代わった時期ははっきりしないが、浜松歌國が『摂陽落穂集』(文化五年編)で「或人のいはく、大坂と書くに、坂の字用ゆること心得あるべし。坂の字は土偏に反るといふ。土にかへるとあるゆえ忌みきらひ、コザト偏に書くべきとなり」と書いて

たことから、大坂に代わって大阪がさかんに用いられるようになったとする説が一般である。

しかしながら、近世でも住吉大社や百舌鳥八幡宮の石灯笼や箕面市で発見された道標(『安永八年春』の銘がある)に大阪の用例も見られ、山片蟠桃の『夢の代』の中にも大阪が何度も出てくる一方、明治期に入ってからでも坂・阪が混用されている例があったという。

大坂を駆逐して、大阪を大いに普及させたのは国定教科書である。明治三六年(一九〇三)年の『小学地理』では「大坂府」と書かれていたが、明治四三(一九一〇)年の『尋常小学校地理卷』から「大阪府」に改められ、以降はこの表記が続いた。全国の子供が小学校で大阪府と教え込まれたのであるから、大阪が普及したのは当然である。

(榎野 勝・記)

*このコラム欄への投稿を募ります。テーマは「おほさか」です。一五〇〇字程度でお願いいたします。